

すべきに、正道のはからい、後世に恥ずとかや、去程に晴明は古今無頭の神人にて、其子孫泰親などいふも希代の博士にてありし也、此泰親は加茂の社に詣てける折ふし、雷落か、りたれども何の障りもなし、平家物がたりにも玄るしたるごとく、奇妙を顯はしたり、其外人の見る諸書に書のせたれば、爰にのぶるに及ず、玄かるに元祖保憲が眼力は明哲なるものなり、曆道は光榮のながれにて、今にあれどもさだかに人えらす、安倍の家筋をば土御門と號して、今に天文道を掌り給ひて、風雲氣色を奏聞あるとかや、晴明より十七代の後有脩卿より、土御門と申す稱號をこり、從三位に叙し、はじめて昇殿ありて、今泰連朝臣にいたつて七代なり、二位にも成給ふ御家とかや、

〔小右記〕寛仁三年六月四日己丑、午時月星共見、月在己、星在月坤、相去七八尺、所三光一時變異、希有也、若太白星歟、從源大納言四條大納言許有消息、源大納言乞送舊奏案、附使送只、今無上天文之人、博士吉昌卒、權博士久部住伊與國云々、公家無被答司、天臺只有其號、有何益乎、當時無公事、嗟乎、嗟乎、

〔宇槐記抄〕久安四年九月廿九日、信西語曰、法皇〇鳥羽能知天文、

〔平家物語三〕法印もんだうの事

同じき〇治承三年十一月七日の夜の戌のこくばかり、大地おびた、しううごいて、や、久し、をんやうの頭あべの泰親、いそぎだいらへはせ參り、今度のおしん、せんもんのさす所、其つ、しみかろからず候、當道三經の中に、こんぎ經の説を見候に、年をえては年を出ず、日をえては日を出ず、もつての外に火急に候とて、涙をはらくとながしければ、てんそうの人も色を失ひ、君もゑいりよをおどろかさせおはします、わかき公卿殿上人は、けしからぬやすちか、泣やうかな、只今何事の有べきかとて、一度にどつとぞわらひあはれける、され共、此やすちかは、晴明五代のびやう